IYEO チャレンジ・ファンド報告書

実行団体：第 49 回「東南アジア青年の船」事後活動実行委員会
事業名 ：Mini SSEAYP 49

1. 本活動の目的
第 49 回「東南アジア青年の船（SSEAYP）」事業の日本参加青年が、事業を通して感じた社会課題である「国際交流への参加ハードルの高さ」や「機会格差」の解決に少しでも貢献すべく、本事業「Mini SSEAYP 49」は、高校生以下の次世代を担うより多くの若者が国際交流への心理的・環境的障壁を軽減し、国際交流へ主体的に参加できるきっかけを創出することを狙いとしました。

2. 活動内容
概要
実施日時 ：2026 年 9 月 5 日（土）13:30-16:00
実施場所 ：かえつ有明高等学校
対象/参加数 ： 10名（学内募集8名、一般公募2名）
主催 ：第 49 回「東南アジア青年の船」事後活動実行委員会
共催 ：日本青年国際交流機構（IYEO）
運営体制 ：第 49 回「東南アジア青年の船」事後活動実行委員会 17名(当日現地参加：12名)

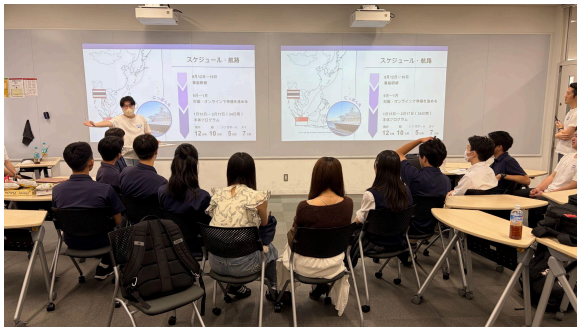
プログラム内容

内容	詳細
オープニング	開会宣言・アイスブレイク（東南アジアのイメージは？）
クイズ大会	民族衣装当てクイズ・タイのことわざ・東南アジアの通貨
ブース体験	食ブース・言語ブース・フォトブース・動画ブースの4つのブースをまわって、東南アジア各国の文化を感じてもらう
座談会	事業概要説明・生徒の質問から話を膨らませて実体験を共有
クロージング	アンケート回答・写真撮影・閉会宣言

3. 活動報告

当日の様子

<table>
<tr><td></td><td></td></tr>
<tr><td>冒頭の挨拶</td><td>東南アジアの説明</td></tr>
<tr><td></td><td></td></tr>
<tr><td>自己紹介/アイスブレイク</td><td>東南アジアクイズ</td></tr>
<tr><td></td><td></td></tr>
<tr><td>言語ブース</td><td>食ブース</td></tr>
</table>

	
フォトブース	動画ブース
	
座談会	座談会
	
SSEAYPの説明	集合写真

4. 成果（アンケートによる事前・事後の変化、先生方からの声）
アンケートの目的：対象者にとって、PPA の目的である①国際交流は決して敷居の高いものではないことを実感してもらうこと、②海外を視野に入れた主体的かつ自由な進路選択について考える契機とすることに資するプログラムであったかを把握するため。

アンケート対象：14名　有効回答：事前 14 名、事後 10 名（当日4名欠席）

年齢分布
中学生：事前2名、事後0名
高校1年生：事前7名、事後7名
高校2年生：事前4名、事後3名
高校3年生：事前1名、事後0名

アンケート項目

	＜事前アンケート＞ Q1～9は5段階評価で実施　1. とてもそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5.全くそう思わない
Q1	国際交流や海外での活動は、自分にとって身近で、気軽に参加できるものだと思う。
Q2	海外の人や文化と関わることに対して、不安よりも「楽しそう」「やってみたい」という気持ちの方が強い。
Q3	国際交流は、特別な人だけのものではなく、自分のような普通の高校生でも主体的・自由に挑戦できるものだと思う。
Q4	外国語（英語など）が完璧にペラペラでなくても、伝えようとする気持ちがあれば国際交流は十分にできると思う。
Q5	自分の今の語学力や知識であっても、海外の人とコミュニケーションをとる工夫（身振り手振りやツールなど）ができる自信がある。
Q6	相手の言葉や文化についてまだ詳しくなくても、交流しながらこれから学んでいけば大丈夫だと思える。
Q7	自分の周りには、国際交流の楽しさに触れたり、海外を身近に感じたりできる機会やきっかけが十分にある。
Q8	今後、自分が参加できるような国際交流活動（イベントやプログラム）の情報や、参加する方法を知っている・見つけられる。
Q9	自分のこれからの進路選択（大学選びや将来の職業など）において、海外を視野に入れる具体的なイメージや選択肢を持っている。
Q10	これまでの国際交流経験の有無
Q11	海外への渡航経験（複数選択可）

	＜事後アンケート＞ 事前アンケートQ1～9に加え、事前アンケートとは異なるQ10～12を実施 5段階評価:1. とてもそう思う 2. そう思う 3. どちらとも言えない 4. そう思わない 5.全くそう思わない(Q1~9)
Q10	本日のイベント（クイズ・文化体験・座談会）を体験する前と後で、国際交流に対するイメージや気持ちに変化はありましたか？ 変化があった方も、なかった方も、その理由と合わせて自由にお書きください。
Q11	参加青年との交流やプログラムを通じて、「外国語でのコミュニケーション」や「言葉の壁」についてどのように感じましたか？ 気づいたことや考えたことを自由にお書きください。
Q12	今日の経験を踏まえて、今後の学校生活や進路選択（将来の選択肢）について、新しく考えたことや、やってみようと思ったことがあれば教えてください。（特になければ「特になし」で構いません）

アンケート結果

＜総合＞

本プログラムは、参加高校生に対して単なる「異文化体験」にとどまらず、主体的な国際交流への踏み出しを促す有効なプログラムとして機能しました。特に、「伝えようとする姿勢があれば言葉の壁は越えられる」という確信の付与（Q4/Q5）と、「今後の進路選択における視野の拡大（Q9）」において顕著な成果を収めました。事前段階でハードルを感じていた層を含む多くの参加者に対し、自己効力感の高まりと具体的な行動・学習意欲（英語学習や海外渡航・進学）を喚起できた点は、本事業の非常に大きな成果です。

＜主要な成果と意識変容のポイント＞

①「語学力の壁」を越えるマインドセットの獲得（Q4・Q5・Q6）

成果:「語学力が完璧でなくても、伝えようとする気持ちがあれば十分」「身振り手振り等で工夫ができる」が大きく改善しました。

考察: 単なる語学学習にとどまらず、実際の参加青年との交流や座談会を通じてコミュニケーションに対する心理的障壁（心理的ハードル）が大きく下がったことが実証されました。

② 身近な機会認知と行動導線の明確化（Q7・Q8）

成果:「自分の周りに機会やきっかけがある」の評価が大幅に高まりました。

考察: 事前段階では「身近に機会がない」と感じていた参加者が、本イベントをきっかけに「自分たちの身近にも国際交流の場が存在する」と認識を改め、次のステップ（他のプロジェクトやイベント等）を探すモチベーションへと繋がっています。

③ キャリア・進路意識の拡張（Q9）

成果:「これからの進路選択において海外を視野に入れる」が大きく向上し、事後平均は2.5となりました。

考察:異文化体験や既参加青年とのリアルな対話を通じ、これまでの国内中心の進路観から「海外進学」「海外での活動」「『東南アジア青年の船』等への挑戦」といった具体的な将来像を描くようになるなど、参加者のキャリアに対する視野が格段に広まりました。

設問項目(評価軸)	事前平均	事後平均	変化幅	評価
Q1. 身近さ・気軽さ	3.1	2.9	-0.2	やや向上
Q2. 参加意欲・期待感	3.2	3.0	-0.2	やや向上
Q3. 主体性とハードル	3.3	3.1	-0.2	やや向上
Q4. 伝えようとする姿勢の重要性	3.5	2.9	-0.6	大幅向上
Q5. コミュニケーション工夫への自信	3.2	2.7	-0.5	大幅向上
Q6. 異文化理解・実践の安心感	3.5	3.0	-0.5	大幅向上
Q7. 機会・きっかけの認知	3.1	2.5	-0.6	大幅向上
Q8. 参加方法の認知	3.1	2.8	-0.3	向上
Q9. 将来の進路における海外視野	3.1	2.5	-0.6	大幅向上

＜個別回答者の分析（変容パターンの分類）＞
（1）劇的意識向上タイプ（例：Nさん、Kさん）
特徴：事前段階では苦手意識や不安、諦め（全項目で4～5）が強かった回答者が、体験後に劇的に前向き（1～2）へと変化。
代表例（Nさん）： 事前はQ4（伝える気持ち: 5）、Q5（工夫の自信: 5）、Q9（進路の視野: 5）と否定的だったが、事後には全項目で「1（とてもそう思う）」へシフト。
成果： 本プログラムが「最もアプローチしたかった層（意識が遠かった層）」に対し、強力な変容の機会を提供できたことを示しています。

（2）具体化・行動化タイプ（例：Cさん、Gさん、Fさん等）
特徴：事前から関心はあったものの、事後の体験を経て「語学の再学習（タイ語・英語）」「『青年の船』への応募」「海外大学進学への意欲」など、具体的なアクションプランへと昇華した層。
代表例（自由記述より）：「タイ語をもっと勉強しようと思った」「海外進学も割とありだなと思った」「英語を議論できるほど極めたい」などの肯定的な決意が見られます。

（3）現状認識・再定義タイプ（例：Dさん等）
特徴：実際の交流を通じて、国際交流の難しさや言葉の壁のリアルさを捉え直し、評価が慎重化・現実化した層。
成果： 漠然としたイメージから、現実的かつ課題感を持った姿勢へと変化したプロセスの現れと捉えられます。

＜先生方の声＞
「東南アジア青年の船」の皆様から事後活動を実施していただいたことで、参加した生徒の「東南アジア」に対する解像度が一段と上がり、個々の国の文化や生活を具体的に想像できるようになったようです。東南アジアとひとくくりに言っても、民族、言語、文化、宗教など実に様々で、教員としても勉強になりました。本事業参加者の皆さんが、旅先で出会ったひとりひとりの顔を思い出しながら今後も関われる経験を得られたこと、そしてそれを高校生に共有していただいたことに大きな意義を感じました。
5. 課題・改善

(参加者JPYのアンケートより)
・下船後の新生活開始や仕事・学業の忙しさ、モチベーション低下により、一部のメンバー（リーダー陣・特定メンバー）に負担が偏ってしまいました。
・コンテンツや方向性を決めるのに半年ほどの時間を要するなど、かなりの時間がかかり、準備が後手に回ってしまいました。
・誰がどのタイミングで忙しいか把握しづらく、タスクの割り振りや共有に課題感を感じました。
・実施させていただいた学校の校内スケジュール（部活、保護者会、文化祭準備等）との兼ね合いや広報期間の短さにより、集客（参加人数）の見通しを立てるのが困難でした。
・名札の準備不足、タイムスケジュールの段取り・リハーサル不足など、事前準備が不十分な箇所がありました。
・飛び入り参加者を想定しておらず、瞬時にスムーズに対応することが難しかったです。

6.終わりに
本事業は第49 回「東南アジア青年の船」の参加青年による事後活動の一環として、国際交流への心理的・環境的障壁を軽減し、より多くの若者が国際交流へ主体的に参加できるきっかけを創出することを目的として、①国際交流は決して敷居の高いものではないことを実感してもらうこと、②海外を視野に入れた主体的かつ自由な進路選択について考える契機とすることとして、着実な成果を上げました。当日の運営には日本青年12名が参画し、かえつ有明高等学校・IYEO・関係各位のご協力により安全かつ円滑に実施できました。ここに深く感謝申し上げます。本活動をきっかけとして、今後も持続可能的に各々が全国各地で事後活動を実施していきたいと考えております。

7.謝辞
このたび本事業開催にあたり様々な関係者の方よりアドバイスと支援をいただきました。特にまだ実績もない弊団体に対して資金支援をいただいた梶原輝史様、永野雄一様、永野正康様、Asian Hope Lab. 井本亜希様ならびにその他ご支援いただいた方々に、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

個別アンケート結果

事前	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
C	2	3	3	2	2	3	1	3	3
D	2	4	4	4	4	5	4	2	2
F	2	1	2	3	1	2	2	4	1
G	4	3	2	1	1	2	5	4	3
I	1	1	1	1	1	1	1	2	2
J	4	4	5	5	5	5	2	2	1
K	4	3	3	3	3	3	3	3	3
L	4	3	4	5	4	4	3	3	3
M	5	5	5	5	5	5	5	5	5
N	3	4	4	5	5	4	4	4	5

事前	Q10. これまでの国際交流経験の有無	Q11. 海外への渡航経験（複数選択可）
C	ある	ある（旅行など）, ある（留学・研修など）
D	ある	ある（旅行など）, ある（留学・研修など）
F	ある	ある（旅行など）, ある（留学・研修など）
G	ある	ある（留学・研修など）
I	ある	ある（旅行など）, ある（留学・研修など）, ある（その他）
J	ない	ない
K	ない	ある（旅行など）
L	ある	ある（旅行など）, ある（留学・研修など）
M	ある	ある（その他）
N	ある	ある（旅行など）, ある（留学・研修など）

事後	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
C	2	2	3	1	1	3	1	2	3
D	4	5	5	4	4	5	4	4	4
F	3	1	2	2	2	1	3	4	2
G	4	5	5	5	4	5	3	2	2
I	1	1	1	1	1	1	1	1	1
J	4	4	5	4	5	4	3	4	2
K	2	2	2	2	2	2	2	2	2
L	4	4	4	4	5	4	4	4	3
M	5	5	4	5	5	5	5	5	5
N	1	1	2	1	1	2	1	2	1

Q10. 本日のイベント（クイズ・文化体験・座談会）を体験する前と後で、国際交流に対するイメージや気持ちに変化はありましたか？ 変化があった方も、なかった方も、その理由と合わせて自由にお書きください。(一部要約抜粋)

・お菓子・言語・衣服など様々な観点から学び、国際交流は外国人と会話することだけではないと改めて実感した。

・国際交流というものにハードルを感じていたが、今回のイベントに参加して、とりあえず経験としていくつかのプロジェクトに参加してみたいと思った。

・東南アジアの言語に抵抗感があったが、タイ語の文法構造や発音の共通点を体験することで、ハングルのように身近な存在へと認識が変わった。

Q11. 参加青年との交流やプログラムを通じて、「外国語でのコミュニケーション」や「言葉の壁」についてどのように感じましたか？ 気づいたことや考えたことを自由にお書きください。(一部要約抜粋)
・話を聞いて「言語の壁」ではなく「言語の坂」であり、頑張れば乗り越えて伝えられるのだと気づいた。
・完璧な語学力よりも、伝えようとする気持ちや身振り手振りが重要だと分かった。ある程度の知識に加えて「主体的な意識」があれば何とかなると感じた。
・どの国でも挨拶や感謝の言葉を少し覚えるだけで相手に安心感や敬意を伝えられることを学んだ。

Q12. 今日の経験を踏まえて、今後の学校生活や進路選択（将来の選択肢）について、新しく考えたことや、やってみようと思ったことがあれば教えてください。（特になければ「特になし」で構いません）(一部要約抜粋)
・自分の世界をさらに広げるためにも「東南アジア青年の船」などのプロジェクトにぜひ挑戦してみたいと思った。
・もっと世界とつながって人生を豊かにするために、議論できるレベルまで英語を極めたい。
・高校生のうちに無理に焦らなくても、大学生や社会人になってからでも様々な国際交流の経験を重ねていきたい。
・外国の大学で国際政治について学ぶのも面白そうだと感じた。海外に進学する選択肢も割とありだなと思った。